



アイヌ文化の振興、現在と未来
第10回

経験を積み函館市へ



儀式中にオンカミ（拝礼）をしている早坂さん

早坂 駿 (はやさか しゅん)

1990年(平成2年)生まれ。北海道旭川市出身。アイヌアートプロジェクト所属。
現在は函館アイヌ協会の事務局長。

札幌大学ウレシパクラブに学生として所属していた際、「開発こうほう」の「アイヌ文化の振興、現在と未来」に、アイヌ文化に携わっている人たちにインタビューをしてそれを記事にしたいという依頼がありました。とても興味をひかれたので、卒業制作の一部として引き受け、4組の方々にお話を伺いました。10月号に引き続き3回目を紹介しますので、ぜひご覧ください。(竹内隼人)

早坂駿さんと私は、年齢は近いのですがこれまであまり話したことはありませんでした。早坂さんは、アイヌアートプロジェクト^{*1}の一員であり、札幌市アイヌ文化交流センター(ピリカコタン)^{*2}勤務を経て、現在は函館市でアイヌ文化に携わっています。こういった経緯があったのか。また、函館市におけるアイヌ文化伝承活動では一体どういうことを行っているのかがとても気になったので、お話をうかがいました。

アイヌの踊りについて

— 踊りをするようになったきっかけを教えてください。

早坂 層雲峡温泉の峡谷火祭りにずっとうちの家族がみんな参加していて、おそらく生まれた時からその祭りには参加していたんだよね。本格的に踊りを始めたのが小学2年生の頃から。踊りを始めたきっかけはあんまり記憶にないけれど、もともとずっと見ていて、カッコいいなっていう思いはあったし、自主性半分。強制はなくて、多分きっかけを与えてもらった感じ。小学2年生の時に、北見の方で伝統舞踊を踊る機会があって、それに向けてエムシリムセ(emus rimse=剣の舞)を練習することになって踊ったのが最初かな。踊りを見た感想は「カッコいいな」だったけど、自分で踊っている時の感想は楽しいなって。アイヌだからという想いを背負わず、純粹に踊り自体を当時は楽しんでたかな。もっとこう踊ったほうがいいかなって思い始めたのは、中学か高校だったと思うんだけど、そう思いながらも実際に鏡を見ながら練習をしていたわけじゃない。自分ではカッコよく踊っていると思っていたながらも、周りからはだらしない踊りだと見られていたみたいなの時期はあったかな。それは中学生になって色気づいたから、カッコつけて踊らなくなった訳じゃなくて、純粹にカッコよく踊っていた

※1 アイヌアートプロジェクト イタオマチマ(かつてのアイヌ民族の外洋船。板綴舟)の復元を目的に集まったメンバーを元に、2000年に結成。現在はアイヌ音楽とロックを融合したバンドとしても活動している。

※2 札幌市アイヌ文化交流センター(ピリカコタン) 札幌市南区小金湯にある、アイヌ民族の生活や文化などを学べる札幌市立の施設。展示室もあり、約300点ある伝統衣服や民具は手にとって見る事ができる。

つもりが周りから見たらダメだった。そういう時期があったような気がする。それで注意されて、まあなんだろう、目覚めた訳じゃないけど、今までのとは違ったんだなと気付いて、ちょっと頑張ろうって思うようになった。でも、教えてくれたのが自分のおじさんだから、どうも素直になれなくて。「教えてくれ」みたいな感じではなくて、基本見て学ぶのと、自分でこんな感じなのかなって思いながらやってきました。

— ちなみに、他にはなにかやっていましたか。

他にムックリ (mukkuri=口琴) もやっていたけど、子供の頃興味あったのが伝統芸能の踊りとかムックリだけだったからだと思うんだよなあ。アイヌのことって全然気にしてないし、アイヌだからとか気負った考えは本当にずっとなくて。それこそピリカコタンに勤め始めてアイヌ文化を多少知ったぐらい。それまではただ楽しみながら、言われればするという感じなんだよね。

アイヌアートプロジェクトについて

— アイヌアートプロジェクトが結成された当時、他の子供たちに対してどう思いましたか。

早坂 いや、単純に年が近いのが多いから、ライバルっていうほども思っていない。アイヌのことを一緒にやる友達ができたぐらいにしか小学生の頃は思っていなかったかな。まあ今でもそんな感じ (笑)。

ただ、アイヌアートプロジェクトは、最初は本当に伝統的なことをやるグループだった。その頃は、踊りをやったり、ムックリをやったりしていたんだけど、大きく変わり始めたのが、正確には覚えてないけれど、中学生の頃ぐらい。トンコリ (tonkori=弦楽器) とかを持ち出して、おじさんがギター弾くようになって。その頃もギターを入れつつ、踊りも踊るといった感じだったけれど、実は高校三年間札幌にいて、寮生活をしてた。その間にアイヌアートプロジェクトが大きく変わった。帰ってきたらバンドグループみたいな感じになって、気づいたら居場所ないじゃないけれど、やることなくなっちゃったなあって。徐々にいろんなものを取り入れていったから、そこからだんだん進化していったのかなと思う。基本メンバーはうちの家族と、新谷家、福本家、結城家で、ちよ

くちよくグループ活動している時に会った人なのか、何人かたまに、サブメンバー的な感じで入って来たり。多分そういうコラボしてあって、バンドの形が主流になっていったんだろうなあと思う。

— それに対して嫌だなあって思いますか。

早坂 嫌な気持ちは全くないけど、切ない気持ちはやっぱり… (笑)。なんだろう、子供の時から一緒にいる人たちだし、アイヌアートプロジェクトとしてやっていきたい気持ちももちろんあるんだけど、それを素直に言えない自分ってのもあって。高校、大学生ぐらいの時にそんな気持ちが大きくて。もし、大学生の時から変わってあって、大人になったなら、多分純粋に「ギター教えて」ってなっていたと思うけれど、どうしても自然に入っていけなくて。変わってしまったから嫌だって訳じゃないし、変わってしまったから自分は携わらないということじゃなくて。純粋に素直になれない自分との葛藤みたいな…。

— ちなみに、どんな方法があったら年代の子供たちと知り合えると思いますか。

早坂 なかなか難しいね。多分、親がアイヌのことをやっている人は踊りに興味を持つと思うんだけど、全然そういうの知らない人はどうしても、差別とかそんなことじゃなくて、携わらないとか拒否してしまう。だから、自分がそうだったように、自然と子供も入っていけるようなグループが一番大事なのかなと思う。強制するのは良くないと思うしね。強制されれば子供は反発するだろうし。自然と入って行けるように。きっと自分の親がそういうことを一生懸命やっている姿を見たら、子供は絶対かっこいいと思うはず。だからその姿を見せると自然と子供たちも入ってくるんじゃないのかなと思います。



子供の頃、エムリムセ (剣の舞) をしているところ

社会に出て

— サッポロピリカコタンに入ったきっかけを教えてください。

早坂 それこそカッコ悪いけど、就活がめんどくさかったのと、あとはアイヌのことを今までやってきたし、どんな形でも携わりたいなという二つかな。それ以外は特に考えていなかった。もともとやっていたから、漠然とアイヌのこと何かしたいなと思っていた。もしも普通のところ就職していたら、今はアイヌのことを全くやらないと思うし。でも続けたい気持ちの方が強かったから、客観的に見てアイヌの方に行ったんだと思います。最初は臨時職員として入ったけれど、臨時職員の人たちは必ず1階の展示スペースを担当することになっている。来たお客さんに展示品を説明して回る。さっきも言ったように、伝統舞踊とかやってきたけれど、言っちゃえばルウンペ、カパラミッ（ruunpe, kaparamip=着物の名前）の区別がつかない、判別ができないというレベルだった。そこでものを見て説明するのを覚える過程で、ちょっとでもアイヌのことを理解できるようになったし、勉強するきっかけになった。本格的にいろんなアイヌのことに携わるようになった。踊りとか伝統芸能の方に興味はあったけど、アイヌ文化には、もともとは興味がなくて、昔差別されたからどうだと聞いても、自分が差別されていないから何とも思ってなかったんだよね。過去の人たちの話だと思っていた。でも、就職して実際に阿部支部長^{※3}の講演を聞いて、そういうことがあったんだな、と感ずることができた。自分がアイヌなんだと思うようになったのも、ピリカコタンに就職したおかげなのかなって思います。

— あの展示すべてを解説するのは大変じゃないですか。

早坂 大変だったけど、知らないとはいえ、自然と入ってきた。マニュアルもあって、実際に説明している人の話を聞いたりして、それを自分のオリジナルなものにしながら、なんとかできましたね。

函館での仕事について

— どういったいきさつで函館に就職したんですか。

早坂 加藤さん^{※4}から、言われて。もともとどういう繋がりかわからないですけど、アイヌアートプロジェクトと加藤さんが仲良くてね。俺はアイヌアートプロジェクトとしての活動をそんなにしていなかったから知らなかったけれど、多分、母親と加藤さんの間で「若いアイヌはいるか」となって、親から自分が推薦されたというか。ピリカコタンも契約期間が決まっているから、終わったあとで途方に暮れる前に、そういう感じになったというのが一応のきっかけ。

— 仕事内容はどんな感じですか。

早坂 会社としてやっているけれど、ここでは事務仕事だったり、仕入れ先とのやり取りだったり、支払いだったり、普通の仕事という感じでやっている。一応、NPO法人とアイヌ協会としてもやっていて、アイヌ協会としては、イベントが開催されたら派遣されて踊りに行ったりとか。NPOの方だったら自分たちで主催する。アイヌ協会だったらどちらかというアイヌ協会に依頼が来て、行く。そんな感じで活動しています。

— ピリカコタンとの違いはありますか。また、ピリカコタンでの経験はどのように活かしていますか。

早坂 今までは家族だったり、協会の人たちについて行っていたので、自分が主役、つまり一番前に立つことはほとんど無かったけれど、今は、一人でもどこかに派遣されたりする。それにあたってのトークスキル、前面に出て喋るのはそれなりに知識がないとダメだから、勉強するきっかけになった。一人でやる以上、カッコ悪いのは見せられないと思うから、アイヌの自分の腕前は向上したと思います。ピリカコタンでの経験は仕事をする上で必須でもないけれど、お客さんに聞かれたり、話すときに「こういう話みたいですよ」と言える。そういうところに繋がっていますね。

— 函館のアイヌ文化に対する動きがどんどん活発になっていきそうです。それについてはどのように感じていますか。

早坂 質問に対する答えじゃないかもしれないけれど、話が進みすぎて怖い。加藤サマサマ、すごいなあと思う。

※3 阿部一司さん。北海道アイヌ協会札幌支部長（当時）。現在は札幌アイヌ協会会長。

※4 加藤敬人さん。函館アイヌ協会会長・NPO法人道南マウコピリカの会理事長。

できる限りサポートしたい思いはあるけれど、自分にできないのが今の状況。アイヌの熱い思いだけというより、エゾシカ皮の利用や普及などは、法律のことも関係しているからね。

今、函館で活動しているアイヌの人は、おそらく加藤さんと自分の二人だけで、今後大きくなっていったら人材が必要になる。人が集まったからといっても、その人々たちを食わしていけるほど盛況になっていくかわからない。加藤さんと自分しかいないってことは、加藤さんが今60歳で、自分が今24歳で、間がない。加藤さんは、あと5年したら引退すると言っていて、そうすると29歳で後を引き継ぐことになる。ものすごいプレッシャーなんだよね。もちろんやりたい気持ちもあるんだけど、ただ楽しむだけのレベルじゃないなというのは感じています。それこそ責任感じゃないけど、ただ踊りをやっただけで食べていけるほど甘くはない。そうするとアイヌのことももちろん、アイヌのことだけじゃなくて、いろいろとほかの戦略も考えていかないといけないだろうと思う。付き合いもやっついていかないといけないだろうし。アイヌのことじゃなくて申し訳ないんだけど、そういうことに関する不安があります。もちろん期待もあるけど、期待もあり不安もあり、です。うまくいけば自分がやりたいことを楽しみながらやっていけるだろうけれど、うまくいくとも限らない。うまくいくとしてそのまま継続するとも限らない。そういう先の不安があるかな。

— 今後、函館のアイヌ文化に対して、自分自身はどうしていこうというのがありますか。

早坂 自分自身が。そうだなあ。あまり大きなことは考えてなかったけれど、必要最低限、働きに来てくれた人を引っ張っていけるぐらいの、アイヌ力はつけていきたいなと思います。

最後に

— アイヌのことに携わって、今面白いことは何ですか。

早坂 ここに勤めてから、伝統の工芸品が作る人によってそれぞれ違うのを見るのも楽しいなと思った。いろんなところから仕入れているし。アイヌ文化は一概にアイ

ヌ文化と一言で言えるような簡単なものじゃないんだなと、あらためて思った。木彫りは見たら全然違う。見たらこの人のだなどか分かるようになっていたりする。函館に来て初めてモノゴトを客観的に見ることができたんだよね。前は、身内以外は劣っていると考えたことがあったんだけど、ここに来たことによって、そういう気持ちを取り外せた。それがなくなったかな。単純にいろんな人と関わるようになったのが大きいのかもしれないけれど。

— 将来はどのようにになりたいですか。

早坂 それはもう函館にいて、加藤さんの下にいる以上そんなにかっこいいことは言えないですけど、働く場を提供することを引き継いでいきたいと思っています。加藤さんに言われて、共感できたから函館に来たのが一番大きなことなので。アイヌのことをやりたいと思ったときに、働ける場所がパッと思いつかなかったんだよね。勝手なイメージだけど、正直、白老や阿寒は自分たちの地方でガチガチになっているイメージがあった。そうじゃなくて、気軽にアイヌのことをやりたいと思える人が来てくれたらいいですし、かといって中途半端な気持ちでは来て欲しくない。でも、どの地方の人でも受け入れられればいいなと思っています。

— なるほど。以上、貴重なお話をありがとうございました。

インタビュー日時2014年11月7日



インタビューー

竹内 隼人 (たけうち はやと)

1992年生まれ、北海道札幌市出身。幼少の頃に家族の影響で札幌ウポポ保存会でアイヌの踊りに親しむようになる。札幌大学文化学部文化学科歴史文化コース卒業。在学中はウレシバ奨学生として札幌大学ウレシバクラブに所属。現在は白老町にある、(一財)アイヌ民族博物館の伝承課に勤務している。